和歌山県立

文書館だより

第12号　平成15年3月

▲友ヶ島第４砲台

風景の歴史③
―友ヶ島の砲台2―

前号では友ヶ島砲台の配置、火砲の構成などを紹介するとともに、由良要塞の全容、明治沿岸砲台の設置目的や特性について述べました。そのため、砲台の訪問は友ヶ島第1砲台だけに留まりましたが、今回は残る4砲台・1堡塁を寄り道をしながら、ゆっくり訪ねることになります。前号と合わせてご覧下さい。

友ヶ島第3砲台

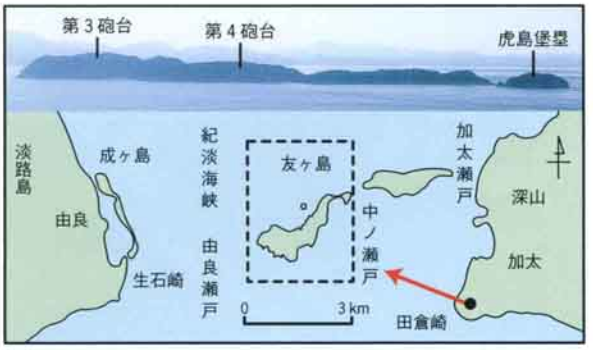
友ヶ島第3砲台は、友ヶ島の最高点に近い標高110mの地点に築かれた28センチ榴弾砲8門編成の砲台で、360度の射界を持つ由良要塞最大の砲台です。第1砲台とともに、友ヶ島砲台の中心的役割を担った砲台ですが、カノン砲台とは異なり、たいへん複雑な構造となっています。

カノン砲と榴弾砲

カノン砲は平射砲であり、前方に障害物があっては砲撃できないため、火砲を守る胸牆（きょうしょう）も砲身より低く押さえねばなりません。第1砲台のように、火砲に防楯を付けることもありますが、防楯など、敵の砲撃を浴びれば何の役にも立ちません。

大口径カノン砲台の防御の弱点を補うため、明治の沿岸砲台で唯一、砲撃時だけ砲身が胸牆より上に上昇する隠顕砲架24センチカノン砲を配備していたのは成ヶ島の高崎砲台です。とはいえ、砲身が上下する細工の多い大砲は、使い勝手が悪く、ふだんの手入れもたいへんだったようで、大正末期の要塞整理期に、普通の27センチカノン砲に置き換えられています。

守りで苦労するカノン砲台に対し、なめ上に砲弾を打ち上げて、敵船の甲板を攻撃する擲射砲である28センチ榴弾砲では、胸牆の背後に火砲を隠すことができます。第3砲台はレンガと盛土でできた高さ5mの胸牆に守られていました。明治の沿岸砲台でも第3砲台のような初期の砲台については、特に防御に重点を置いていたので、前面だけではなく横も背後も同様の砲牆を築き、2門単位の砲座をすりばち状のくぼ地の底になるように囲いました。万一敵の砲弾がどれかの砲座に着弾しても、他の砲座は安全なわけです。



田倉崎砲台より友ヶ島

防御に関しては完璧な第3砲台も、どうして敵艦船を攻撃できるのでしょう。もちろん、すりばちの底でがんばる砲手は前後左右が見えません。

目標の照準

レーダーのない時代、照準は測遠機は用いるにしても人間の目で行うしかありませんでした。前が見えるカノン砲は直接照準ですが、榴弾砲は砲座から距離をおいた観測所からの間接照準でした。観測所が砲手の目となるわけです。もっとも、カノン砲台でも精密な照準のためには、観測所はあるに越したことはないので、第1砲台にも、砲床に隣接して観測所が設置されていました。

背牆より砲座・胸牆▲

◀2門単位の砲座

榴弾砲砲台では、敵の砲弾が観測所に着弾すれば、それだけで戦闘能力を喪失します。砲台の安全のためには、観測所と砲座は離れるほど都合が良いことになります。

第3砲台の右翼観測所は最も右側の砲座から60m隔たった標高120mの友ヶ島最高点にあり、電話で砲手に照準を指示しました。現在、展望台として整備され、観測所は残っていませんが、ここからは第1砲台に隣接する友ヶ島灯台、紀淡海峡が眼下に見おろせます。第3砲台が紀淡海峡を砲撃する場合は、第1砲台の頭越しに217kgの巨弾を飛ばすことになります。第1砲台側の兵員にとっては、ものすごい砲声が後方頭上から降ってくるわけです。

28センチ榴弾砲は砲身長3m足らず、砲身重量が10トンと、見栄えのしないずんぐりした形状で、射程も8000mにとどきませんが、操作性の良い、安定した弾道を誇る国産砲のエースでした。

大規模な地下要塞

第3砲台は、砲座を砲牆で囲うとともに、横牆・背牆下は地下道が走り、砲側庫・掩蔽部などを配した大規模な地下要塞と

横牆下地下道

将校宿舎側より弾薬庫側への入口▲

◀後方通路と弾薬庫

なっています。また、露天の後方通路沿いにある5連のレンガ造りの弾薬庫も、背牆側の地下に組み込まれています。地下には、探照灯用とは別の自家発電装置による照明設備が施されるなど、細部にわたって、強固かつ精緻に構築された砲台です。

太平洋戦争終戦後の武装解除において、他の砲台と同様、火砲はすべて撤去されましたが、要塞そのものは爆破を免れました。

虎島堡塁

由良要塞に限らず沿岸要塞はことごとく、高度な軍事機密事項であり、その内部は秘密のベールに厚く覆われていました。砲台建設工事も、現在の公共事業のようにどこかのゼネコンによる請負工事ではなく、すべて陸軍直営です。

そのため敵国もよほど上手に諜報活動をしないと要塞の詳細までつかめません。それでも、大阪湾口では、大きな船舶の航路となっている由良瀬戸が沿岸砲台でガチガチに固められていることぐらい、容易に想像できます。

紀淡海峡への侵入方法

友ヶ島第1砲台や第3砲台で由良瀬戸を封鎖しても、紀淡海峡の防衛は完璧とは言えません。相手国側の立場に立って、由良瀬戸からの強行突破以外の方法を考えて見ましょう。

まず、頭にうかぶのは加太瀬戸からの侵入です。加太瀬戸は本土に近く、陸上からの攻撃にさらされやすいとはいえ、海峡幅800m、水深も30mあり、由良瀬戸についで艦船の航行が容易です。

渦潮で知られる鳴門海峡や、紀淡海峡の中ノ瀬戸は多くの岩礁があり、大きな艦船の航行は極めて危険ですが、物理的には不可能でないため、無理をしてでもここから侵入することもありえます。

虎島堡塁より中ノ瀬戸

また、夜陰にまぎれて、特殊部隊が小舟で友ヶ島や淡路島に上陸し、背面から砲台そのものを攻撃し、破壊したり、占領したうえで、艦隊がゆうゆうと王道(由良瀬戸)を通過することもあります。艦隊が正面からまともに沿岸砲台と戦っては勝ち目がないため、むしろこの作戦が最有力です。

由良要塞では、敵の奇襲に対しても十分すぎるほどの備えを講じています。22ある砲台中半数の11砲台が由良瀬戸に対応し、残り11砲台と8堡塁は加太瀬戸・中ノ瀬戸・鳴門海峡の防御と陸側からの背面攻撃に備えたものです。友ヶ島では敵の奇襲に応接するのが虎島堡塁です。

要塞島友ヶ島の弱点

第1砲台から第4砲台までの巨砲で紀淡海峡へにらみをきかす友ヶ島の弱点は中ノ瀬戸側でした。夜間の小艦艇の通過や、上陸しての砲台襲撃は中ノ瀬戸からです。そのため直接、中ノ瀬戸を守る虎島堡塁は友ヶ島砲台のなかでも重要な位置を占め、見通しの良い虎島の頂上部に堂々たる堡塁を築いていました。火砲は9センチ速射カノン砲4門という小規模なものですが、的が小さく軽快に動き回る小艦艇に対しては、巨砲より小口径火砲のほうが役に立ちます。

虎島堡塁は要塞としての立地条件が良かったこともあり、第2次大戦後の武装解除では、弾薬庫と堡塁入口付近を除いて徹底的に破壊されました。現在、観光客のよりつかない廃虚となっており、不気味に静まりかえっています。

虎島堡塁跡

友ヶ島第2砲台

友ヶ島第2砲台は第1砲台の200m北側にある27センチカノン砲4門編成の砲台で、第1砲台を補強するものです。

由良要塞にあって、27センチカノン砲を配備していたのは、友ヶ島第1砲台・第2砲台のほかは、加太砲台と由良地区の生石山第4砲台だけで、すべてフランスからの輸入砲です。27センチカノン砲

は、1万mを越す大きい射程を得るため、弾丸の発射速度が約600m／sと速く、当時の技術力では、国産化できませんでした。そのため、第3砲台の備砲費は8門で14万円でしたが、第2砲台は4門で30万5千円と高くつきました。

また、27センチカノン砲は28センチ榴弾砲に比べて砲身重量が2倍以上あったため、海岸沿いの第2砲台はともかく、第1砲台のような高台まで人力で運ぶのは困難を極めたことでしょう。

大正12年12月東京湾要塞の三崎砲台、13年12月豊予要塞の高島第2砲台に相次いで30センチ長榴弾砲が据えられ、翌14年6月東京湾要塞に30センチカノン砲2門入り千代ヶ崎砲塔砲台が完成するなど、関東大震災後の要塞整理期に強力な要塞砲が配備されるまでの約30年間、27センチカノン砲が国内最強の要塞砲でした。

第2砲台（爆破された胸牆）

第2砲台は、海岸低地の砲台であるため、敵の艦船からは丸見えとなり、艦砲射撃の格好の目標にされます。そのため、第1砲台のように、砲台正面を開けっ広げにし、ノーガードの打ち合いをするわけにいかず、大口径カノン砲台としては、他に類を見ないほど頑丈な胸牆と砲側庫・掩蔽部を備えています。

しかし、元々立地条件の悪い砲台であり、第1砲台ほど重要な役割を果たしていたわけでないので、大正末期に廃止され、12センチ速射カノン砲2門に替えられました。

戦後の武装解除に際して、砲座正面の胸牆が爆破され、厚さ2mの分厚いコンクリート壁が寸断され、倒れています。完全に廃止されていたら爆破を免れたかも知れません。また、波の浸食作用も加わり、砲台本体も右翼側から崩壊してきています。

友ヶ島第4砲台

標準的な榴弾砲砲台

第4砲台は、友ヶ島の中心部よりやや東側にある標高80mの山頂部に位置する28センチ榴弾砲6門編成の砲台で、第3砲台を補強するとともに、360度の射界を生かし、中ノ瀬戸を守ります。大規模な第3砲台と比べて、ぐっと小ぶりで、標準的な砲台ですが、2門編成の砲座を砲牆で囲い、横牆・背牆下に地下道を張り巡らせる構造は同じです。

ただ、地形の関係からか、観測所が砲牆の上に置かれています。これだと、敵艦船に万一砲座を狙われたら、すりばちの底にある砲座が被弾するより先に観測所に当たってしまいます。また、弾薬庫は後方通路の将校宿舎側にあります。背牆側に弾薬庫があれば、決して正面からの敵弾の直撃はありません。地下施設用の電気照明はぜいたくとしても、日本屈指の榴弾砲砲台である第3砲台には防御面でもかないません。

第4砲台（将校宿舎）

廃止砲台

もとより第4砲台は、由良瀬戸の防衛については、第3砲台の補助的役割に過ぎず、当初重要であった中ノ瀬戸についても、由良要塞最後の加太砲台（第1砲台と同編成）と田倉崎砲台（第4砲台と同編成）が完成すれば、脇役にならざるを得ません。その結果、中途半端に残された第2砲台と違い、第4砲台は要塞整理期に完全に廃止されました。

明治35年12月に着工された田倉崎砲台は、露天式の簡素な砲台であり、守りは固いが、何かと不便な地下要塞である第4砲台とは好対照です。見た目面白くもない田倉崎砲台ですが、自然の地形をそのまま生かした高さ10mの胸牆といい、砲座から遠く離した石とコンクリート造りの頑丈な観測所兼司令所など、要所をおさえた合理的な砲台です。

要塞整理で火砲が撤去され、放棄されていた第4砲台は、第2次大戦後の武装解除による破壊から免れました。艦載砲による砲撃にも耐えられるほど頑丈に構築された沿岸砲台は、乱暴な開発の手が加えられないかぎり、何の保護がなくとも80年足らずの歳月ではビクともしません。木造部分は朽ちていますが、初期榴弾砲砲台の特徴である地下要塞のほぼ完全な姿を残しています。

第4砲台（背牆下の地下道）

田倉崎砲台（観測所兼司令所）

友ヶ島第5砲台

砲台の過剰配備

友ヶ島第2・第3・第4砲台はそれぞれ友ヶ島北方海域も射程圏に入れていますが、野奈浦など沿岸部には死角もできています。友ヶ島第5砲台は死角となる北側沿岸部をカバーしています。もちろん、由良瀬戸や中ノ瀬戸を突破して、こんな所まで敵船が回り込むことなど、常識的にはありえません。

日本の国力・軍事力が欧米先進国にはるかにおよばない時期に計画された明治沿岸砲台は、軍事的価値が高かったこともあり、何もそこまでというほど濃密に構築されました。

由良要塞では、最も北側に位置し、首線が大阪湾を向いた成山第1砲台・深山第1砲台や、いくら背面攻撃に備えるといっても大川山・高森山堡塁などは特に必要性は疑問です。

地味な砲台

友ヶ島地区においても、重要な役割を担った第1・第3砲台、虎島堡塁に較べて、第2・第4・第5砲台は影のうすい砲台です。第2・第4砲台は要塞整理時に廃止されましたが、この2砲台以上に紀淡海峡防衛の役には立ちそうもない第5砲台は残りました。

現在、友ヶ島観光の起点となっている野奈浦は、当時も軍用の船着き場があり、となりの欽荘浦とともに、兵舎・発電所・弾薬本庫など砲台施設が集中する地区でした。

第5砲台は、敵艦船を攻撃する砲台ではなく、虎島のような強固な堡塁でもありません。野奈浦周辺だけを守る地味な小規模砲台で、備砲されていたのも、12センチ速射カノン砲6門でしたが、万にひとつも野奈浦が敵の手に落ちてはならないということで、現役のまま残されました。

第5砲台

日露戦争とその後の沿岸砲台

明治37年の日露戦争の時は、明治陸軍も沿岸要塞の完璧さだけに捕らわれず臨機応変に対応しています。司馬遼太郎の名作「坂の上の雲」にも描かれているように、難行している旅順要塞攻略のため、沿岸砲台に配備されていた28センチ榴弾砲18門を旅順に運びました。差し迫った危険のない東京湾防衛より、日露戦争の帰趨を左右しかねない旅順攻略が重要でした。旅順要塞陥落後、奉天の日露決戦の場にも、この巨砲6門が持ち込まれ、日本軍最強の野戦砲となりました。

加太町深山の由良要塞砲兵連隊第三大隊も、静かな加太瀬戸をじっと守っていたのではなく、旅順と奉天の戦いに参加しました。深山第2砲台で行っていた28センチ榴弾砲の発射訓練が実り、203高地奪取後、観測所設置による旅順港内への正確な砲撃により、ロシア太平洋艦隊を壊滅させました。

日露戦争の勝利により強国の仲間入りを果たし、それ以後日本では、対外攻勢のための軍備拡張が主となり、専守防衛でしかない沿岸砲台はその地位を低下させました。

さらに、沿岸砲台にとって致命的だったのは、第1次世界大戦での爆撃機の登場です。沿岸砲台は艦船には有効でも、航空機に対しては全く無力です。欧米先進国から遠く離れ、四方を海で守られた日本では、沿岸砲台の軍事的価値は残りますが、太平洋戦争末期の本土空襲に対して、何等なすすべもありませんでした。

（森脇義夫）

パネル展示の紹介

明治二十二年八月 大洪水と熊野本宮大社

明治二十二年八月十八日から十九日にかけて、紀伊半島を通過した台風は和歌山県下に暴風雨をもたらしました。この暴風雨は河川の氾濫をまねき、ことに有田郡（有田川）、日高郡（日高川・切目川・南部川）西牟婁郡（会津川・富田川・日置川）、東牟婁郡（熊野川）の被害は甚だしいものでした。

東牟婁郡の熊野川洪水の被害は空前絶後のもので、本宮町付近での水量は七丈（約二十一メートル）に達し、新宮市でも三丈五尺（約十・五メートル）の増水になったと言われています（『和歌山県災害史』）。熊野三山のひとつ熊野本宮大社（熊野坐神社）は、本宮町の熊野川と音無川・岩田川の合流する大斎原（おおゆのはら）と呼ばれた中州に、上四社・中四社・下四社を中心に鎮座していました。本宮大社は熊野川の激流にのまれ、上四社（第一・二・三・四殿）を残し他はすべてが流失しました。

那賀町名手に住む堀源太夫は、この洪水被害の新聞記事を筆写し「明治廿二年八月十八日我和歌山県下前代未聞ノ大洪水ニ附和歌山新聞抜萃記」と題した記録を残していました。この資料を見ると、洪水被害の詳細が新聞紙上で報じられ始めたのは、八月二十四日ごろであったことが分かります。しかし報道当初は東牟婁郡関係の記事はほとんどありません。それは洪水被害による交通網の混乱のため、情報入手の手段であった郵便が機能していなかったからです。東牟婁郡関係の情報は汽船の乗客の話が主で、「新宮町モ非常ノ洪水全部浸水ノ赴ナリ」「馬場町等モ浸水其被害実ニ少ナカラザル由」などと記されるのみです。本宮町に関しては、二十五日になってようやく「本宮ノ飛報」と題した記事が掲載されています。「熊野坐神社（熊野本宮大社のこと）ハ本殿ヲ除クノ外ハ残ラス流出ナシタリト、又本宮村役場并ニ書類等ハ悉ク流失シ民家百八十余戸ト人民二十余名ハ流失ナセショシ」とあり、本宮大社の社殿流失が記事になりました。しかしこの話は意外に早く市中に流布したようで、堀源太夫の八月二十三日付日記（「日誌」第一号）にはすでに「本宮御宮流失トノ噂サ」と記されています。

東牟婁郡の洪水被害の記事が増え始めるのは八月二十七日以降のことでした。翌二十八日の東牟婁郡警察署久富警部補の報告には「二十日発二十五日着」とあり、実に五日かかって和歌山市内へもたらされたものでした。また同日には本宮大社宮司、本宮村長の報告記事があり、「新宮ヨリ来タリシ人ノ話」として流失した本宮大社社殿の一部が三重県南牟婁郡木ノ本村（現熊野市木本）に漂着したことも記しています。（文書館寄託「堀家文書」による。）

洪水後、程なくして社殿の復旧工事が始まりました。当時の金額で二万二千二百円の国費が充てられましたが、流失以前の姿への復旧は不可能であったため、上四社の復旧が優先されました。大斎原北方の現社地に上四社のみが遷座され、中四社・下四社は大斎原に石祠を建てて祀られました（写真）。復旧工事にあたって、木材確保のため泥中から破損した建物の部材を集める作業も行われ、その作業中、流失した社殿に祀られていた十七体の御神体が発見されています。復旧工事は明治二十四年三月に終了を見、三月二十二日には工事関係者から本宮大社へ社殿等が引き渡されました。三月二十九日に遷座式が執行され、現在見る本宮大社の神域はこの様にして成立しました。

「一件書類」添付写真、昭和７年ごろか

社殿の完全復旧は将来への課題として残されました。そのため様々な働きかけが行われたと思われますが、実行に移されたのは昭和八年のことでした。昭和八年五月十五日付本宮大社宮司東弘門の社殿復旧に関する申請書（右下写真）では、ふたつの復旧案が提示されました。第一案は旧社地、大斎原への復旧、第二案は下図にあるように現社地を後方へ拡張し上四社・中四社・下四社の社殿を建設するというものでした。この時期に復旧案が示されたことには、昭和六年の満州事変以降の、国家と結びついた神社の急激な伸張と係わってくるものと思われます。しかしながらこの復旧案は採用されることなく、本宮大社は現在に至っています。（県立図書館移管資料「熊野坐復興一件書類」による。）

（伊藤信明）

歴史講座を開催

今年の歴史講座は、10月5日（土）、12日（土）、26日（土）の3回にわたって、きのくに志学館で開催しました。講師は当館文書課長の森脇義夫が務め、『和歌山県史』近現代1をもとに、友ヶ島や加太・深山の要塞、和歌山医学校、新和歌浦の発展、北山村の飛地について講演しました。

5日と12日は、友ヶ島や加太・深山の要塞について紹介しました。大砲をはじめ観測所・弾薬庫・宿舎等の要塞の施設を立体OHPを用いて詳しく解説しました。アンケートによると現地見学を希望する方も少なくなかったです。

26日は和歌山医学校、新和歌浦の発展、北山村の飛地について紹介しました。和歌山医学校については、創設から廃校にいたるまでの経緯について説明しました。無試験で医術開業免許取得できる特典がある反面、一つでも不振科目があれば落第し、再度落第すれば退学となる甲種医学校の厳しい進級試験が印象的との声がありました。新和歌浦の発展については、交通の要所から観光地としても発展してゆく様子を説明しました。鉄道網が整備されていないこの時代、新和歌浦が大阪・紀南方面への和歌山市の海の玄関口であったことを知る方は少なかったようです。北山村の飛地については、明治4年11月の飛地削減のための県統廃合にもかかわらず、逆にこの地域が飛地となってしまった原因を検証しました。受講者の感想によると「講師の考察がとてもおもしろかった」ようです。

今年も皆様と和歌山の歴史を楽しく探訪することができました。平成16年夏には「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されることが見込まれ、今後、益々和歌山の歴史が注目されると思われます。これからも、文書館は『和歌山県史』をもとに郷土和歌山の歴史を皆様にお伝えしたいと思います。

深山第１砲台

深山第２砲台

民間所在資料調査員研修会「自治体史編さんと資料保存」「市町村合併と公文書保存」

文書館では、県内の個人のお宅や蔵、寺社等で保存されている記録類（古文書等）がどこに、どんな状態であるかを確認する「民間所在資料保存状況調査」を実施中です。現在は和歌山市と御坊市・日高郡を対象地域として、各市町村に設置された調査員が調査を行っています。

この調査員の研修会が平成15年1月17日に開催され、松本市文書館長小松芳郎氏が、「自治体史編さんと資料保存」「市町村合併と公文書保存」について講演されました。当日は調査員のみならず県内外の市町村から、市町村史編さん担当・文化財担当・文書主管課の方々など多数参加されました。どちらの講演も、小松氏の実体験・実践をもとにお話しいただけたので大変参考になりました。

①「自治体史編さんと資料保存」

小松氏は『松本市史』の編さんに携わった後、平成10年開館の松本市文書館館長をお勤めです。松本市の特徴は、市史編さん事業の計画時から、編さん後も収集した資料を活用できるよう保存管理することが決められていたことで、結果、編さん終了直後に文書館が開館しています。この間の実際の取り組み（文書館設立までの運動）を基に、自治体史編さん、資料収集、そしてその後の保存の際に何が大事か、お話しされました。特に所蔵者との「継続的な」情報交換の重要性の指摘が印象的でした。

②「市町村合併と公文書保存」

松本市を実例に明治・昭和の「大合併」時の公文書廃棄の実態を明らかにされ、現在進められている市町村合併に伴う公文書の安易な廃棄を防ぐため、文書館の全国組織などが行っている取り組みを紹介されました。

その取り組みを受けて、総務省は14年2月、各都道府県にあてて「市町村合併時における公文書の保存について」という文書を発行し、公文書の適正な保存の徹底を図るよう市町村への指導を要請しています。

この文書と「公文書館法」が定める地方公共団体の「適切な措置を講ずる」責務から、合併を進める市町村は、合併協議会での協議事項に公文書保存の問題を含める必要があると訴えられました。

貴重な資料・文献の寄贈

平成14年度も貴重な歴史資料・文献の寄贈がありました。多くの方々にご利用いただけるよう大切に保存します。

・和歌山県教職員組合
　昭和初期の県内旧村郷土史、明治10年代小学校教科書、紀伊教育・和歌山県教育など154点
・池田孝雄氏
　歴史関係雑誌など645点
・木村数馬氏
　図書105点
・木村忠男氏
　図書62点

平成15年度行事案内

○ 古文書講座
開催日　7月下旬～8月下旬毎土曜日
回　数　5回
コース　初級・中級
申込方法　詳細は広報紙上に掲載
古文書に関心があり、古文書の基礎知識を修得したい方（初級）やより深く学習したい方（中級）を対象に開催します。

○ 歴史講座
開催日　10月中旬土曜日
回　数　3回
申込方法　詳細は広報紙上に掲載
『和歌山県史』をもとに、歴史を探訪します。

○ 民間所在資料保存状況調査
県内の個人のお宅や蔵、寺社等で保存されている記録類（古文書等）がどこに、どんな状態であるか（保存状況）を調査しています。平成14年度に引き続き、平成15年度も和歌山市と日高郡で行います。各市町村の調査員が電話・訪問により調査しますのでご協力お願いします。また、所蔵者の方に限らず、文書の所在をご存知の方は是非文書館にお知らせください。

○ パネル展示
県民の皆様が当館を身近に感じて、利用していただくために、所蔵資料をもとに制作したパネル展示を常設しています。

文書館の利用案内

◇ 利用方法 ◇

○ 閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。
○ 閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。
○ 複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

◇ 開館時間 ◇

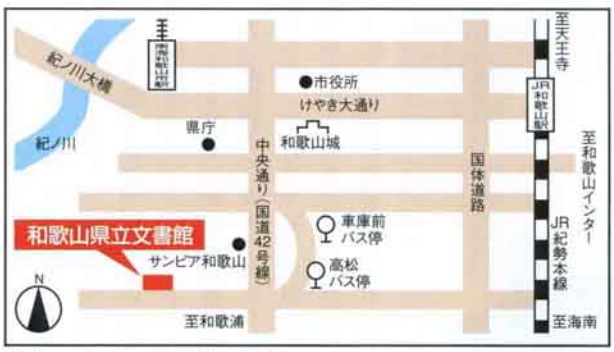
火曜日～金曜日　午前10時～午後6時
土曜日・日曜日　午前10時～午後5時
5月5日・11月3日　午前10時～午後5時

◇ 休館日 ◇

○月曜日・国民の祝日（5月5日・11月3日を除く。ただし、その日が月曜日にあたるときはその翌日）
○年末年始（12月28日～1月4日）
○館内整理日（毎月初日・1月5日・月の初日が月曜日のときは翌日も休館）
○特別整理期間（毎年6月中に10日間）

◇ 交通のごあんない ◇

和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分
JR和歌山駅からバスで20分
南海電鉄和歌山市駅からバスで20分



◇ホームページアドレス◇
http://www.wakayama-lib.go.jp（きのくに志学館）
http://www.wakayama-lib.go.jp/KS/monjyo/montop.htm
（和歌山県立文書館）

和歌山県立文書館だより　第12号
平成15年3月31日　発　行
編集・発行　和歌山県立文書館
〒六四一―〇〇五一
和歌山市西高松一丁目七―三八
きのくに志学館内
電　話　〇七三―四三六―九五四〇
FAX　〇七三―四三六―九五四一
印　刷　株式会社　和歌山印刷所